

こうして、カナダでの研究生活の中で、研究上の思想的基盤から方法論、そしてさまざまな知識や経験等、私がカナダから得たものははかりしれない。それに、カナダの自然は私にとっていつまでもこの上なく魅力のある世界なのである。(富山大学教授)

政治学

米加の平等主義の差に関心

阿部 齊



私はもともとアメリカの政治に強い関心を寄せていた。とくに、アメリカとヨーロッパの差異がどこから生じたかを明らかにすることは、今でも私の主たる関心事である。学問のジャンルでいえば、アメリカとヨーロッパを比較政治学的に考察することが、私の課題であるといつてよい。

ただ、比較政治学的な文脈としては、ほかにアメリカをカナダやラテンアメリカと比較する方法もある。一九六六年から二年ほどハーバード大学で勉強していたときの私の先生であったルイス・ハーツ教授は、アメリカやカナダなどヨーロッパから派生した文化を持つ国について、独自の理論を構築していた。その頃からハーツ教授の影響もあって、私もアメリカとカナダの比較に強い興味を覚えるよ

うになった。

カナダとアメリカは地理的に接近しているながら、政治制度や政治文化の上では、多くの違いを示している。カナダは議院内閣制であるが、アメリカは大統領制である。連邦制をとっている点では両国同じであるが、アメリカの state とカナダの province はけっして同じではない。政党の組織形態も異なるし、アメリカが排他的な二党制であるのに対して、カナダには有力な第三党あるいは第四党が存在する。こうした差異がなぜ生じたかを明らかにすることで、アメリカとカナダのそれぞれの政治的特性も明らかになると思われる。

しかし、これまで私が最も強い関心を寄せてきたのは、アメリカにおける民族集団相互間の対立が、政治的統合を脅かさなかったのに対して、カナダにおけるイギリス系とフランス系との対立が、深刻な政治的分裂を招いたのはなぜか、という点であった。この点については、一九七一年の『政治学年報』にささやかな論文を寄せたこともある。

今の私の最大の関心事は、アメリカとカナダの平等主義における差異である。アメリカが世界で最も平等主義的志向の強い国であることは、改めて指摘するまでもないであろう。家族の解体、モラルの低下、犯罪の激増など、最近のアメリカ社会の顕著な傾向とみられるものも、結局は平等主義の所産といつてよい。アメリカに比べて、カナダ社会の秩序は高度に安定しているが、それは平等主義化

の差異に基づくものであろうか。それとも、他の原因によるものであろうか。平等主義社会の矛盾は、わが国の社会でも徐々に表面化しているだけに、私はこの疑問に是非答えたいと考えている。(筑波大学教授)

ケベック問題

「汝、カナダと共にあるべし」

伊藤 勝美



「スイスのジュラ地方のフランス語系住民のあいだに分離運動がみられる。カナダのケベックにもフランス語系住民がいる。後者について研究したらどうか」。ほぼこのような示唆を恩師木下半治先生からいただいた。約十数年前のことである。当時「大国中心主義」に毒されていた私にとって、まさに晴天の霹靂。「ジュラ」、「カナダ」、「ケベック」などは、当時の私の研究生活において全く縁遠いものであった。

「何故カナダか」、「何故ケベックを」と思い悩んだ私は、木下先生の紹介でカナダ大使館の大窪憲二氏(現在日本カナダ学会顧問)にお目にかかり、「集中講義」を受けることになった。このような「見える手」に導かれて、terra incognita(未知の国)であったカナダは次第に身近な存在になり、カナダ研究に第一歩を

踏み入れることになった。

私のカナダ研究の動機は偶然的・受動的なものであったが、今にして思えば、木下先生の示唆は、種々な点からみて歴史の流れに沿うものであった。三年余の手探りの勉強ののち、一応『フランス系カナダ問題』を書き上げたが、この段階でカナダ研究から撤退するか、これをサイド・ワークにするか、それとも今少し深入りするか、と思案していたが、ある夜、モンカルム、ウルフ両将軍(注)の亡霊が現われ、告げて曰く、「汝、カナダと共にあるべし」と。結局、イギリスによるニュー・フランスの「征服」以後今日にいたるまでカナダの政治を揺り動かしてきた「フランス系カナダ問題」(ケベック問題)、そして「少数民族問題と近代国民国家」から逃れ得ないでいる。

私はこれ以外に、カナダについて、地域主義、政党制、憲法改正論争(史)、対外関係、ナショナリズムなどに手を出してきたが、政治文化、先住民族問題等とともにこれらのテーマをさらに追求し、カナダ政治の総合的・体系的把握に努めていきたいと思っている。さらに、スイス、西ドイツ、オーストラリア、アメリカ合衆国、それにカナダの連邦制について比較研究をしたいと考えている。

まだ道は遠い。日暮れを気にせず、「急がず、休まず」で行くほかないと思う昨今である。

(注)一七五九年のケベック攻防戦で、モンカルムはフランス軍の司令官、ウルフはイギリス軍の司令官であった。両